

(一財)北海道開発協会では、非営利の市民団体が行う地域活性化活動に対して平成14年度から助成を行ってきており、これまで133件の活動を支援してきました。これらの活動がさらに発展していくよう平成20年度から助成を受けた団体の方々が活動成果等を発表、参加者同志が地域づくりについて自由な意見交換をしていただく「助成活動発表会・懇談会」を開催しています。令和元年11月12日、平成30年度に助成を受けた8団体が成果を発表しました。

クローズアップ③

第11回北海道開発協会助成活動発表会・懇談会 各地で展開する地域活性化活動をサポート

(一財)北海道開発協会開発調査総合研究所



伊達洞爺湖地域の歴史・文化を世界へPR

活動名：ICOM KYOTO 2019ポストカンファレンス in 北海道伊達
伊達洞爺湖ミュージアム地域振興プラットフォーム 石井 智之 氏



伊達洞爺湖地域は、世界遺産登録を目指す北黄金貝塚、入江・高砂貝塚の存在や、伊達市を開拓した旧仙台藩亘理伊達家に由来する武家文化財などがありますが、これら歴史的な施設や博物館の多くは、地域資源として十分に活用されていません。当プラットフォームは、観光消費が循環する仕組みを構築し、持続的な発展に寄与することを目的に、多様な主体が連携協働し世界に通用する観光地域づくりを目指しております。今回はICOMポストカンファレンスの実施に取り組みました。

ICOM（国際博物館会議）は、博物館の進歩発展を目的に設立した国際組織で、世界138カ国、約4.4万人が参加する団体です。ICOMでは、博物館教育、民俗学、考古学、自然科学など、分野ごとに委員会活動を

行い3年に一度、一堂に会する会議を開催しています。

2019年のICOMは京都で開催され、本会議終了後、関係者同士の交流や学術的視察を目的にICOMポストカンファレンスツアーが日本各地で開催されました。

北海道では、伊達・洞爺湖地域を舞台に9月8～10日の日程でツアーが実施され、テクニカルビジット（視察）として、二風谷アイヌ文化博物館や北黄金貝塚、だて歴史文化ミュージアムを視察し、だて歴史の杜カルチャーセンターで、シンポジウムが開催されました。最終日は、入江・高砂貝塚、洞爺湖ビジターセンター、火山博物館、金比羅火山災害遺構を訪れるとともに、建設中の民族共生象徴空間「ウポポイ」も視察しました。主要な参加者は、ICOM会長のアクソイ氏をはじめ、博物館、考古学、民俗学の各々の国際委員会委員長のほか、ICOM一般参加者など19カ国、約40人が参加しました。シンポジウムでは、一般市民や外国関係者を含め約200人が集まり地方博物館の活用の重要性が話し合われました。

「ウポポイ」を視察したアクソイ会長からは、アイヌ民族の視点で語る展示など、整備の考え方についても感銘を受けたというコメントを頂いています。

今回のポストカンファレンスでは、ICOM関係者に概ね好評でしたが、都市部の視察箇所が無かったことや英語版のパンフレットが用意されていなかった、といった課題も指摘されました。

今後は、伊達市洞爺湖町の縄文遺跡群の2021年世界遺産登録に向けたPR活動など支援も続けていきます。

渚滑川と松浦武四郎^{つな}を繋ぐ観光産業構築

活動名：渚滑川における上下流の交流及び新たな資源を活用した魅力と付加価値創出による観光産業構築の取組み

しょこつがわ連携研究会 高橋 浩徳 氏



当研究会は、西オホーツク地域の観光振興等の取組から始まっています。今回は、渚滑川と松浦武四郎のつながりをテーマに、三重県松阪市と滝上町・紋別市の交流会を企画しました。松阪市から松浦武四郎生誕

200年記念実行委員長ほか25名が参加し、旭川空港から滝上町へ移動するバスの中で、北海道・滝上町・紋別市・渚滑川の歴史文化を説明しました。また、滝上町文化センターでは、武四郎の渚滑川踏査の足跡を紹介するパネル（A0判2枚で作成）やアイヌ民具などの資料が展示される「松浦武四郎とアイヌ文化展」を見学し、当研究会メンバー等と意見交換も行いました。渚滑川踏査を紹介するパネルは、様々なイベントでも活用します。

また、いつもは通行止めになっている白幽林道（大規模林道）の見学会を春と秋に開催しました。秋の開催は2日間で行い、1日目は滝上の溪谷散策で、2日目は、白幽林道の見学です。

事業が中止となった大規模林道は閉鎖されていますので、見学会では、特別に許可を得て入林します。林道は渚滑川支流のオシラネツブ川に沿って造られており、林道終点のトンネル付近から望む紅葉は、一見の価値があります。そして、昭和初期のハッカ蒸留窯が保存されている古民家を訪れ、最後に見所の一つとしてオシラネツブ川沿いの武四郎と縁がある「深場」を見学しました。そこは開拓時代の町民憩いの場でした。見学後は、参加者と意見交換を行いました。

このほか当研究会では、絵本「武四郎とショコツアイノ」の出版や、武四郎が渚滑川踏査を行った7月7日（安政5年）を記念して、令和元年7月7日に渚滑川踏査で到達した最深部の道路脇付近に「武四郎 しょこつの道」の看板を制作し設置しました。また同年の7月には、初めて渚滑川が清流日本一の認定を受けた

ことで、今後は清流日本一を絡めながら、いろんな分野で活動が続けたいと思います。

「松浦武四郎RIDE」サイクリングイベント開催

活動名：北海道命名150年記念自転車で巡る松浦武四郎縁の地

NPO法人 なよろ観光まちづくり協会 畑中 覚是 氏



2018年は、北海道命名150年とその名付け親である松浦武四郎生誕200年の節目にあたります。名寄市近郊の音威子府村には「北海道命名之地」の記念碑が天塩川沿いに建立されていますが、名寄市周辺にも宿营地など

武四郎と縁ある地が多数存在しています。名寄地域で、武四郎の偉業振り返りと合わせたサイクルツーリズムの普及・拡大を図るため、縁の地を自転車で巡る「松浦武四郎RIDE」のイベントを2018年8月19日に実施しました。

コースは、名寄駅前の交流プラザを発着地として、かつて武四郎が天塩川を往復した際、休憩もしくは宿営した記録が残る場所を巡る、全長55kmとして設定しました。

参加者には、そこに建てられた看板を読みながら、北海道や武四郎に関する歴史を学んでもらうとともに、北海道開発局提供の武四郎の「天塩日誌」なども配布しました。

今回のイベントには、旭川市など名寄市以外からの参加者を含め41名が参加しました。名寄市の観光資源や地域の食をPRするため、昼食に地域食材を使ったバーベキューを提供するとともに、地元のミニトマトを生産する農家での収穫体験を組合せました。また名寄市を南北に流れる天塩川は、カヌーの聖地と言われ、市内にはカヌーポートがあることから、自転車以外のアクティビティなどの観光PRも行いました。

開催後のアンケート結果では、休憩が少し多すぎ。距離が少し長い。トイレが少ない。など幅広い参加者によるイベント作りの難しさを経験しました。また設定距離については距離を1.5倍にしたら良いという意見もあり、今後は、自転車のレベルに合わせたコース

設定も必要となるかもしれません。

このイベントは、2019年度も松浦武四郎RIDE2019として継続開催しています。来年度以降も継続的に開催したいと考えています。

釧路阿寒自転車道の利用促進

活動名：地域住民・企業・団体連携による「くしろ地域のサイクル環境づくりプロジェクト」

くしろロコサイクルプロジェクト 松岡 篤寛 氏



釧路阿寒自転車道（通称：湿原の夢ロード）と周辺エリアを活動地域に、サイクリングを活用した地域の活性化や交流促進を目的として、2018年4月、任意団体を発足しました。当団体は、行政もオブザーバーとして

参加しており、官民協働の取組となっています。

湿原の夢ロードは、旧雄別鉄道の線路跡に1978年9月に整備された25kmの自転車道で、昨年で開通40年を迎えました。自転車道の周囲には、釧路湿原や北斗遺跡、動物園、温泉施設など魅力的な地域資源が多数ありますが、ほとんど活用されていない状況です。

こうした地域資源の利用促進を図るため、沿線の魅力スポットの紹介や自転車道の広域マップを掲載した冊子の製作、ホームページ開設、サイクル交流イベント開催など、地域住民や道内外のサイクリストに向けた広報活動を行いました。また自転車道は、往復50kmと長距離になることから、観光客を含め、気軽にサイクリングが楽しめるよう釧路市内で借りたレンタサイクルを2カ所の休憩スポットで返却できる「ワンウェイ・サイクリング環境整備実験」の活動にも今回の助成事業で取り組みました。

今回の実験によって、ハード面とソフト面の課題の洗い出しを行い、その対応に取り組んでいます。ハード面では、劣化によって損傷したアスファルト舗装のひび割れ等は、走行時の振動原因となり、特に損傷の著しい箇所は道路管理者に伝え、改善してもらう事になっています。また危険な工作物は、今年の9月頃から撤去などの対応も始まっています。ソフト面では、

自転車道沿いに残る鉄道遺構の案内板作成や、分かりづらい案内標識などの対応も考えています。

今回の活動は、地域の金融機関から表彰され、また大手航空会社に注目されました。今後は、地域資源を案内できるサイクルガイド育成にも尽力し、観光客の増加に結び付く活動になるよう継続していきます。

歴史ある街並みを着物姿でまち歩き

活動名：江差着もの語り～「着物で歴まち散策」発信活動

江差町歴まち商店街協同組合 坂本 ゆみ 氏、中島 晶子 氏



歴まち商店街は、歴史的な建物が数多く残る江差町の旧国道1.1km、通称

「いにしえ街道」の沿道を活動拠点としています。「着物で歴まち散策」の取組は、平成23年以降、毎年5月開催の「花嫁行列」と、2月上旬～3月上旬に開催する「北前のおひなさん」の2つのイベントがきっかけです。

花嫁行列は、婚礼カップルの他、血縁者、知人、スタッフ、エキストラ総勢60名が参加して町を和服で歩きます。北前のおひなさんは、ひな人形の寄附や飾り付けの活動を通じ、歴まち商店街活動の理解が深まった取組です。イベントを契機に花嫁行列に使用してほしいといった着物の寄附が多くなりましたので、これをもっと活用しようと、平成28年から「着物で歴まち散策」を企画しました。和服を着る機会が少なくなった若い女性の利用が徐々に増えてきました。

着物レンタルは着付込みで一式2千円です。着付けスタッフがボランティアなので安価で提供可能となっています。歴まち商店街のイベントは、口コミやメディア紹介の効果で、年々来場者数が増え、高い評価を頂いています。着物散策の利用者も平成30年度は43名でしたが、令和元年度では上期だけでも61名と増加しました。

最近では、着物体験によって日本の伝統文化を味わうことができることから、北海道を訪れる海外旅行者

向けのオプションメニューとして、江差町の体験プログラムが注目され、旅行会社によるモニター調査も訪れています。

歴史的風景を町民と観光客が一緒に作り上げることが、満足度向上には重要であると考え、今後も美しい歴史的町並みや体験プログラムの提供を維持しながら、感動を与えられる風景づくりを行っていきたいと考えております。

子どもたちを中心とした浦幌町のまちづくり

活動名：「地域・学校協働」を学ぶ短期滞在型研修

NPO法人 うらほろスタイルサポート 本間 悠資 氏



浦幌町でも人口は減少し、児童も減っています。こうした中、2010年3月に浦幌高校が閉校したことで、町外に進学した子どもたちが浦幌町に戻って来ないのでは、との危機感が高まりました。このため、子どもたちが

夢と希望を抱いて将来の浦幌町を引き受けていくことを目指し、地域の人達の全面的なバックアップにより小・中学校におけるふるさと学習、キャリア教育を展開する「うらほろスタイル教育」が始まっています。

活動は2008年に始まり、町の協議会で行っていましたが、事業の多様化により、2018年3月にNPO法人化し運営されることとなりました。

こうした浦幌町の取組は、学校と地域が協働する優良事例として評価され、道内では文部科学省の「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）」導入の先駆けでもありました。地域と一体となったコミュニティ・スクールは、平成29年度から努力義務化となっており、専門的な知識を持つコーディネーターなどの人材育成が進められています。そうした人材育成のための研修を浦幌町で実施することにより、町の交流人口に結び付けようというのが今回の取組です。

事業の一つとして、大学生など若い方を対象に合宿形式の研修会を実施しました。2018年8月に4名の学生が参加し4日間の研修を行い、教育大学釧路校宮前先生の講義や、地元農家が先生となるコミュニティ・

スクール事業「うらモンGO!」の準備を行い、地域の子どもたちと一緒に参加体験してもらいました。もう一つの取組が1カ月程度のインターン生の^{しょうへい}招聘で、2019年度は子ども向けの自主企画や合宿型研修のプログラム進行、その他うらほろスタイルに関する事業に帯同しながら業務体験をしてもらいました。

合宿型研修の参加者の進路は、教員やまちづくりの仕事が大部分でした。参加者からは高い評価を得られましたので、今後は、募集人数拡大と参加費を主な事業費としながら、合宿研修の継続を目指します。そのためにも、うらほろスタイルの活動や浦幌町のまちづくり協力への価値を町内外に日頃からアピールすることが大切だと考えています。

北海道開拓^{げんいん}を牽引したドサンコの次なる活躍の場

活動名：ドサンコホーストレッキングによるエコツーリズム

北海道和種馬保存協会道央支部 阿部 英雄 氏



私たちが飼育するドサンコは、サラブレッドに比べ小さな馬です。北海道の開拓地では、農耕馬として広く利用されていました。また戦時中には、道内から中国大陸へ軍馬として送られた歴史もあります。トラックや農業機械の発達によって、ドサンコの活躍の場は主に

ホーストレッキングや乗馬へと変わってきました。

今回の活動では、地域振興と在来馬保存の可能性を探ることを目的に、ホーストレッキングビジネスの立上げとネットワーク化を検討しました。一つは稚内の宗谷丘陵において、地元と連携したホーストレッキングのビジネスの可能性を探りました。

トレッキングに協力を頂いた場所は、稚内空港が目の前に広がる森林や牧草地を含めた3,000haの敷地で、集客には極めて便利な場所です。

2018年度は、会員が馬を連れ現地の状況を確認し、2019年度、関東圏から参加者を招いてホーストレッキングを体験してもらいました。使用した6頭のドサンコは、恵庭から現地まで馬運車に乗せ、休憩を挟み8時間かけて連れて行きました。参加者は、乗馬経験者

でしたが広い草原で馬を走らせた事で、十分満足したとのアンケートの回答を得ました。

また石狩川下流当別地区自然再生地でのトレッキングの試行では、枯れたヨシの中でドサンコを歩かせ楽しむ事ができました。併せて、「石狩さけまつり」の来客に海岸での引き馬体験をしてもらいました。

宗谷丘陵は、風景や広がりなどモンゴルに劣らないホーストレッキングの状況が整っていました。課題は、トレッキングを指導するインストラクターの確保や、冬期間はトレッキングが行えないことです。恵庭市の牧場で、いろんな活動を通じてインストラクター養成に取り組みたいと思っています。

アイヌ文化の空間的整備の取組

活動名：イオルの森再生に向けた近自然森づくり技術の共同開発
NPO法人 近自然森づくり協会 岡村 俊邦 氏



アイヌの伝統的生活空間（イオル）は、アイヌの人々の衣食住や伝承活動に必要な自然素材の供給を可能とするものです。平取町では「イオルの森」などのイオル再生事業を進めています。

アイヌの伝統的衣服の一つにアットゥシという織物があり、これはオヒョウという木の樹皮が材料となっているのですが、現在の平取周辺の森にはオヒョウはほとんど見られなくなっています。

このため、当協会は平取町と協議しながら、開拓によって牧草地となった土地やオヒョウの無くなった森を再びオヒョウ等が育つ森林に戻す取組を行っています。

今回の取組は、自然の森から種を採取し、種を蒔き、そして苗を育てる生態学的混播・混植法を用います。これは、種レベルと遺伝子レベル、生態系レベルとする生物多様性を考えた方法です。また、草と木は競争関係にあるため、草があると苗木が育ちません。そこで、草地に防草シートを設置し、一年ほど時間をおく事で、草が根ごと無くなり、そこに木を植え森に戻していきます。植える木は、地域の遺伝子を持つ種から

苗を育て植えていきます。

もう一つは、多様性の低い単純な森を多様性の高い混交林に変えていく手法です。これは近自然森づくりの手段の一つである育成木施業を取り入れるものです。

通常は、単純な森を多様な森にするため、生えている木を群状皆伐^{*1}し、そこに高い密度で格子状に同種の苗木を植えるのが一般的な方法です。しかし、この方法は、既存の樹木の多くを伐採し、一時的に裸の場所が発生し、森の環境が大きく変化します。同じ種類の樹木の中でも生育良好な樹木を育成木に約10m毎に選木し、その周囲で成長を阻害する木を伐倒することで育成木は成長しやすくなり、併せて林床にも光が届くようになったことで、いろんな種が飛来・発芽し、多様な広葉樹が生えてきます。このような森の環境の激変をともしない育成木施業を10年に1度、繰り返すことで、森が多様化し、かつての針広混交林の森へと変わることができます。育成木施業に伴う伐採や、残した育成木が育つと切り出し、森全体を維持するための費用にすることができます。伐採木や育成木の切り出しは、林床や育成木が傷つかないように馬搬^{*2}で搬出することを提案しています。ここでも、間伐で出来た隙間に防草シートを設置し、草やササなどを枯らした後に自然状態では生えてこないオヒョウの苗を植えていきます。

活動にあたって、どのようなイオルの森にするのか目標を設定し、その目標達成のために種をとり、種を蒔き、苗を育て、植える、植えたあとには追跡調査を行う、ということを平取町と協働で行っています。

防草シートを有効に利用することで、多様性のある森を再生することが可能となりました。平取町に、かつてアイヌの人たちが利用した植物が生える「イオルの森」を再生する見通しが明らかとなりました。



* 1 群状皆伐

0.1ha程度の大きさで分散させてモザイク状に伐採する方法。

* 2 馬搬

切り出した木材を馬で運搬すること。